様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３４３３

研究課題名（和文）要介護高齢者の排便ケアの質の向上を目指した地域包括的排便ケア支援システムの開発

研究課題名（英文）Evelopment of a support system for regional comprehensive care of defecation aimed at improving quality of defecation care for the elderly requiring care

研究代表者
榊原　千秋（SAKAKIBARA, Chiaki）

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号：２０３６７５０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、要介護高齢者の排便ケアの質の向上を目指し地域の包括的排便ケア支援システムを構築することである。A県内３地域にモデル地域を設置し、急性期病院、介護老人保健施設、老人福祉施設、訪問看護ステーション等の各施設の課題を分析し、施設を超えてディスカッションできる場づくりと、排便ケアのスペシャリストからなる「排便ケア支援専門職チーム」の指導を受けながら各施設別に排便ケアの実態と課題を分析し、地域の排便ケア支援システムのモデル案を作成した。継続的に排便ケアが行われるためのサポート体制の確立や施設の枠を超えた情報交換の場が生まれた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to build a comprehensive defecation care support system in a region aimed at improving quality of defecation care for the elderly in need of care. A model region was established in 3 regions in A prefecture and in each facility such as acute stage hospitals, nursing healthcare facilities for the elderly, welfare facilities for the elderly and home-visit nursing stations issues were analyzed. Conditions and issues of defecation care at each facility were analyzed while creating opportunity for discussion outside that of the facility and receiving guidance from “defecation care support specialist team” made up of defecation care specialists and a model plan of defecation care support system for a region was created. A support system for continuous care of defecation was established and a place for information exchange outside that of the facility framework was born.

研究分野：地域看護学

キーワード：排泄ケア　ソフトシステムズ方法論　アクションリサーチ　ブリストルストールスケール　地域包括的システム　リーダー育成　POOマスター　チームコロン

１．研究開始当初の背景

（１）施設入所高齢者の 40～60%が便秘と判断されており、3 日間便が出なければ下剤投与という指示がケアに組み入れられ下剤が投与され、摘便・浣腸といった即効的な排便管理が習慣的に行われている。便秘で硬便になっている者やさらに処方された下剤によって軟便になり便失禁を引き起こしている者が多かった。

（２）排便ケアの質の向上のためには、個々の施設の排便ケアの課題を明らかにし、施設ごとの排便ケアの改善に向け取り組むこと、便の性状に注目した排便ケア方法の有効性である。入院期間の短縮等から、地域包括的な排便ケアシステムの確立が必要である。

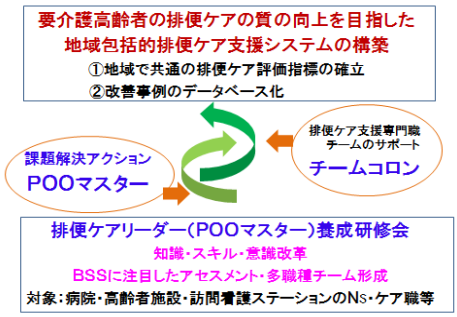
２．研究の目的

本研究の目的は、要介護高齢者の排便ケアの質の向上を目指し地域包括的排便ケア支援システムを構築することである。地域包括的排便ケア支援システムとは、継続的に質の高い排便ケアが行われるためのサポート体制の確立や施設の枠を超えた情報交換によるベストプラクティス等を確立することである。

３．研究の方法

A 県内にモデル地域を設置し、病院・施設の排便ケア支援システムとして、急性期病院、療養型病床群、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、在宅の排便ケア支援システムとして訪問看護ステーション、グループホーム等の各施設の課題を分析し、施設を超えてディスカッションできる場づくりと、排便ケアのスペシャリストからなる排便ケア支援専門職チーム（以下、チームコロン）の指導を受けながら各施設別に排便ケアの実態と課題を分析し、地域の排便ケア支援システムのモデル案を作成する。

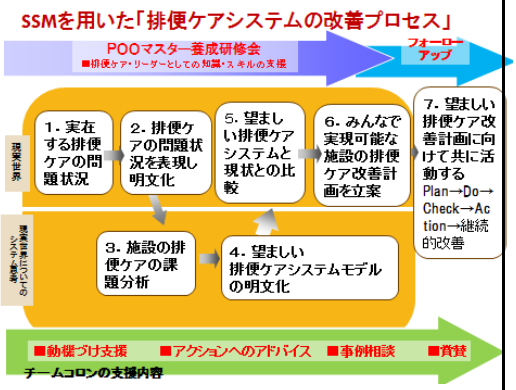
本研究における排便ケアリーダー（以下、POO マスター）とは、各施設の排便ケアの課題を分析し施設の実態に合わせて排便ケア方法を改善することができる者で、各施設の排便ケアの指導者となり施設及び地域の排便ケアの質の改善をめざす。また、多主体で多職種の排便ケアのスペシャリストからなるチームコロンは、事例検討会のアドバイスや研修会の講師を行うと共に、各施設の形態や地域の排便ケアの実態に応じた課題の分析を行う。POO マスターは、要介護高齢者への排便ケアについて、事例検討会を開催し、排便ケア支援専門職チームから指導を受けることができる。要介護高齢者の排便状態が改善した事例は、チームコロンの排便ケアアドバイザーが評価を行い、匿名化した上でデータバンク化する。本研究は、アクションリサーチを用いた実践研究である。研究者と実践家が共に、地域全体で、各施設の排便ケアの改善ができる人材の育成に取り組むもので、地域包括的排便ケア支援システムを構築することで、要介護高齢者の排便ケアの質の向上を図るものである。



（１）調査協力施設の選定

A 県内の病院・高齢者入所施設・訪問看護ステーション 238 施設に研究協力を依頼し、研究内容の説明会を行った。その後、研究協力を得られた病院・施設・事業所の代表者に文書で研究内容について説明した。

（２）排便ケアリーダー養成研修会の開催研修会は、ソフトシステムズ方法論（以下 SSM）を活用し、各病院・施設・事業所と地域の排便ケアの実態と課題を明らかにし排便ケア改善計画を立案・実践・評価する。



（３）スタッフの意識・知識・技術の状況調査

＜調査項目＞自記式質問紙調査：排便ケアアセスメント実施状況

（４）スタッフ、要介護高齢者、各施設の状況の調査・分析・評価

＜調査項目＞参加観察記録、成果発表会資料及びディスカッション記録、研修会事後評価会議記録

（５）排便ケア改善事例のデータバンク化、排便ケア情報の一元化、施設共通の評価指標の開発と臨床応用、有効性の検証、継続・持続性の効果

４．研究成果

（１）エリアの設定

Ⅰ期は、A 県全体の病院・施設・事業所を対象に排便ケアリーダー養成研修会を開催し、医療圏で、３つのエリアに分けて、地域包括的排便ケアシステムの構築を図った。

Ⅱ期は、A 県内のエリアのうち僻地で医療過疎の１エリアを選択し、排便ケアリーダー養成研修会を開催し、地域包括的排便ケアシステムの構築を図った。

（２）調査協力施設と対象

Ⅰ期は、A 県内の病院・高齢者入所施設・訪問看護ステーション 238 施設に研究協力を依頼した。12 施設から同意を得て、24 名が参加した。施設は、病院 4、介護老人福祉施設 4、訪問看護事業所 4、職種は、看護師 16 名、介護職 7 名、理学療法士 1 名だった。

Ⅱ期は、病院・高齢者入所施設・訪問看護ステーション・通所施設 76 施設に研究協力を依頼した。21 施設から同意を得て、53 名が参加した。施設は、病院・診療所 6、介護老人福祉施設 2、グループホーム 6、訪問看護事業所 1、通所施設 5、地域包括支援センター1 だった。職種は、保健師 4 名、介護支援専門員 5 名、社会福祉士 5 名、看護師 16 名、介護職 7 名、管理栄養士 1 名だった。Ⅰ期に養成した POO マスター7 名を研修会のファシリテーターとして養成した。

（３）排便ケア支援専門職チーム（以下チームコロンの設置）

消化器外科医 2 名、コンチネンスアドバイザー2 名、薬剤師 2 名、管理栄養士 2 名、WOC2 名、NST 専門看護師 2 名、老年看護専門看護師 1 名、理学療法士 1 名、作業療法士 1 名、老年看護・地域看護学大学教員 2 名からなるチームコロンを設置した。

（４）ソフトシステムズ方法論（以下 SSM）を活用した研修会の開催研修会を通じて施設と地域の排便ケア改善計画の立案・実施の成果をアクションリサーチで明らかにした。

（５）研修会の内容

研修会の内容は、Ⅰ期・Ⅱ期とも、①排便ケアに必要な知識・スキルの学習として、排便のメカニズム、ブリストルストールスケール（以下 BSS）の記載方法、アセスメントスキル、排便ケアの選択方法、②排便ケア改善計画の立案として、施設・地域の排便ケアを改善できるシステムの構築を目的とし目標と実施方法を明記した計画の立案、③地域や組織内教育の方法の学習として、リーダーシップに必要な知識・スキル、自己覚知、伝達方法、コンピテンシー、チームマネジメント等だった。Ⅱ期は、①大腸癌、②排泄と転倒についての学習を追加した。研究会は OFF-JT と OJT を組み合わせた演習を中心としたプログラムとした。Ⅰ期は、フォローアップ研修として、排便ケア改善計画の実行の支援を毎月 1 回、土日に開催した。内容は、下剤やイ

レウスや栄養等の研修会と事例検討会だった。Ⅱ期は、現場の巡回支援を行った。内容は、院内研修会の開催、事例検討会への助言だった。

OFF-JTとOJTを組み合わせた演習を中心としたプログラム

	OJT	施設の排便ケアの現状把握と課題抽出
①	講義	排便ケアの現状と課題
	演習WS	施設・地域の排便ケアの現状
②	講義	排便のメカニズムと病態
	演習WS	施設・地域の排便ケアの課題について
③	講義	排便ケアのアセスメントとケア
	演習WS	望ましい排便ケアについて
	OJT	排便ケアの事例の選定とBSSの記載
④	講義・演習	事例から学ぶ排便ケア、事例検討GW
⑤	講義・演習	事例発表、事例検討GW
	OJT	排便ケア改善計画の立案(組織内の調整)
⑥	演習	排便ケア改善計画の発表
	OJT	排便ケア改善計画の実行

（6）排泄に関するスタッフの意識調査

無記名自記式調査をⅡ期の各施設で実施し、協力が得られた 325 名（男性 26 名、女性 299 名）から回答が得られた。平均年齢は 49.5 歳、平均経験年数は 18,8 年、看護師が 154 名、介護福祉士が 74 名と 5 割以上だった。排泄委員会への参加状況は、委員会が無いが 46 名、参加無しが 233 名と 9 割以上だった。排泄ケアの学習の機会は有りが 50 名と 2 割以下だった。排便のアセスメントでいつも行っているの上位は、排便日誌から情報を読み取りアセスメントができるが 133 名、排便障害のある方に関わった時、多職種との連携に働きかけることができる 135 名、排便に課題がある方について定期的にカンファレンスを行うが 128 名だった。行っていないの上位は、排便回数の確認が 137 名、便意の有無の確認が 108 名、便の量、便の性状の確認が 97 名だった。多職種との連携やカンファレンスを行っているが、根拠となる排便状況の情報収集とアセスメントが十分に行われていない可能性が示唆された。

（7）排便ケア改善計画の内容

①チーム部会活動の発足

組織を越えて多主体で多職種が地域包括的に排便ケアの質の改善に取り組む 1）排便ケア教材作成チーム、2)排便ケアマニュアル作成チーム、3)スタッフの意識調査チーム、4)事例検討会運営チームが発足した。

②排便カレンダーの開発

要介護高齢者や介護者が、便の性状と量を簡便に記入できる排便カレンダーを開発し全施設で活用した。

③介護老人保健施設・ケアハウス・クリニック・訪問看護介護との協働

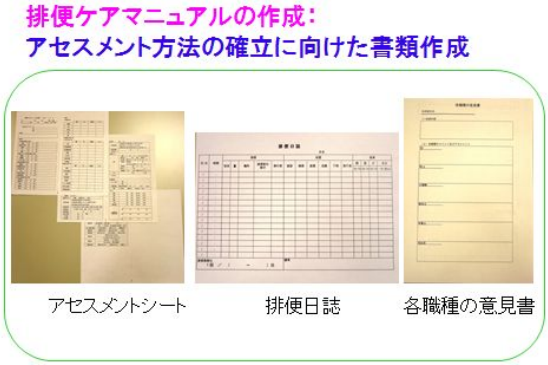
看護師・介護福祉士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・管理栄養士の多職種からなるコンチネンスケア委員会の設置・POO マスターを中心とした研修会・事例検討会の開催。

④訪問看護ステーションと薬局の協働

合同研修会の開催、下剤の効果の確認ができる同一アセスメントシートの作成。

⑤急性期病院・老人保健施設で、電子カルテに BSS が導入された。

⑥市民公開講座、地域サロンで一般住民向けの便秘予防の講話を実施した。



（８）考察・今後の展望

①施設や地域の実状に合わせたSSMを活用した排便ケア改善計画は、多くのアクションを生むことができ効果があった。

②記載した BSS をアセスメントしケアを選択するには、実践能力が必要であり、フォローアップ研修は、実践能力の向上に効果があった。継続的研修は、地域の排便ケアリーダーの連携や新たな仲間づくりに効果的だった。

③地域包括的排便ケアシステムは、多主体多職種の連携だけでなく、地域住民への発信にも効果があった。構築した本システムのネットワークは、排便ケアの質の向上だけでなく、生活習慣病や認知症等、その他の病態のネットワークにも活用できる。

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（計２件）

①榊原千秋、正源寺美穂：第Ⅳ章高齢者の健康障害と看護技術②排尿・排便障害、看護実践のための根拠がわかる老年看護技術、泉キヨ子・小山幸代編、査読無、2015、203-215

②榊原千秋：いのちのスープの会、食べることの意味を問い直す 物語としての摂食・嚥下、新田國夫・戸原玄・矢澤正人編、査読無、2014、72-85

[学会発表]（計２件）

① 榊原千秋、塚崎恵子、正源寺美穂、市森明恵：要介護高齢者の排便ケアの質の向上を目指した地域包括的排便ケア支援システムの開発　－地域包括的な排便ケアリーダー（ＰＯＯマスター）育成プログラムの成果－　第 27 回日本老年泌尿器科学会、2014.6.13～2014.6.14　山形テルサ（山形県山形市）

② 榊原千秋、塚崎恵子、西村かおる、神山剛一：介護老人保健施設における排便ケアシステムの構築を目指した介入、第 22 回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会、2013.5.24～2013.5.25　静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ（静岡県静岡市）

６．研究組織

(1)研究代表者

榊原　千秋（SAKAKIBARA, Chiaki）
金沢大学・保健学系・助教
研究者番号：20367501

(2)研究分担者

正源寺　美穂（SHOGENJI, Miho）
金沢大学・保健学系・助教
研究者番号：80345636

(3)連携研究者

塚崎　恵子（TSUKASAKI, Keiko）
金沢大学・保健学系・教授
研究者番号：20240236

市森　明恵（ICHIMORI, Akie）
金沢大学・保健学系・助教
研究者番号：80507369

(4)研究協力者

佐々木　美穂子（SASAKI, Mihoko）
安東　則子（ANDO, Noriko）
村田　雅人（MURATA, Masato）
北山　幸恵（KITAYAMA, Yukie）
橋本　昌子（HASHIMOTO, Masako）
神山　剛一（KAMIYAMA, Gouichi）
西村　元一（NISHIMURA, Genichi）
西村　かおる（NISHIMURA, Kaoru）
大谷　千晴（OOYA, Chiharu）
今西　里佳（IMANISHI, Rika）
中村　悦子（NAKAMURA, Etsuko）
中林　聡子（NAKABAYASHI, Satoko）

金子　ゆかり（KANEKO, Yukari）
土田　範行（TSUCHIDA, Noriyuki）
大谷　有加（OOTANI, Yuka）